

艦隊これくしょん-置いていく者、置いて行かれる者-

きいこ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

主戦力鎮守府の中で最も戦果をあげている事で有名な横須賀鎮守府。

そこに所属している瑞鶴はある出撃任務で随伴艦娘である赤城を見捨てて撤退するという冷酷な決断を取る。

それがきっかけで鎮守府内の艦娘からは恨みのこもった視線を向けられ、後ろ指を指されるようになってしまう。

特に赤城と仲の良かった加賀からは特に強い憎悪を向けられるようになり：

別小説で使おうと取っておいたけど結局使わなかったので短編連載という形で投稿、長くは続きません。

目次

第1話 「瑞鶴の場合1」	1
第2話 「瑞鶴の場合2」	8
第3話 「瑞鶴の場合3」	15
第4話 「瑞鶴の場合4」	22
第5話 「瑞鶴の場合5」	30
第6話 「瑞鶴の場合6」	36
第7話 「瑞鶴の場合7」	46
第8話 「瑞鶴の場合8」	57

## 第1話 「瑞鶴の場合1」

突然だが、艦隊の旗艦リーダーというのは時に残酷な選択を迫られるときが  
ままある。

そもそもこの鎮守府では提督の方針により、旗艦の艦娘にはかなり  
強い命令権限が与えられている、特に撤退など、こと艦娘の生命に強  
く結びつくような状況においては提督とほぼ同等の権限を持つ、これ  
は鎮守府の提督室で指示を出す提督よりも、実際に現場で事を見て行  
動している艦娘の方がより状況を把握できるという提督の考えによ  
るものだ。

実際提督も旗艦の判断を尊重する場面も多いし、随伴の艦娘も原則  
として旗艦の艦娘の命令には従わなければならない。

早い話が、旗艦というのは艦隊の中で最も偉い立場であり、それと  
同時に責任ある立場なのだ。

「…提督、出撃艦隊旗艦の瑞鶴が具申します」

だからこそ…

「大破状態の赤城先輩を放棄、5体での撤退を開始、戦線を離脱します」

自身の判断、発言に伴う影響や責任の重さを、改めて思い知らされる。

◇

「ず、瑞鶴さん!？」

「何言ってるの!？」

瑞鶴の提督に対する具申内容に、随伴艦の扶桑、鈴谷、天龍、朝潮は全員耳を疑った、なにせ赤城を見捨てて撤退すると言っているのだから当然だろう。

『…本当に、それしか無いんだな?』

「…はい、それが最善の選択だと、私は判断しました」

赤城を放棄する、という瑞鶴の判断を聞いた提督はインカムの向こう側でふむ…と唸るような声を出した後、口を開いて結論を出した。

『分かった、旗艦の判断を認めよう、赤城を放棄しての撤退を許可す

る』

「…申し訳ありません、よりによつて赤城先輩を…」

『俺はお前の旗艦としての能力においては全幅の信頼を置いている、たとえその対象が赤城だとしても、それが旗艦のお前にとって最善の選択なんだとすれば異論はない、俺も提督としてそういう事に対する覚悟は出来てるさ』

「……………」

今の状態の提督の言葉に何と返せば良いのか分からず、瑞鶴は何も言わずに通信を切った

「……………赤城先輩、私…」

瑞鶴は騒いでいる随伴艦の言葉を無視し、大破相当のダメージを負つて座り込んでいる赤城を泣きそうな顔で見下ろしている、脚部の機動艀装は敵からの攻撃で損壊しており自力での移動はほぼ不可能、おまけに随伴艦の状態も全員中破相当以上のダメージを負っており、目下戦闘中の現状で彼女を庇いながらの撤退は「無理」だと瑞鶴は判断した、早い話が今の赤城は足手まといだということだ。

「…いいんですよ、あなたの判断は何一つ間違つてはいない、ここで私を庇えばさらに被害は拡大し、轟沈する艦娘も私だけでは済まないでしょう、ならば私を切り捨ててこれ以上の被害を最小限に抑える、旗艦として賢明な判断です」

これから見捨てられるというのに、赤城は瑞鶴を責めることもせず、旗艦として正しく冷酷になれる瑞鶴を評価した。

「旗艦というのは時に残酷な決断を迫られます、そこで必要とされるのは、生半可な甘さではなく、優しい冷酷さです」

赤城はそう優しい口調で立ち上がると、残っている艦載機を弓の弦に添える。

「幸い飛行甲板は生きています、ほとんど力はないでしょうが、ここで敵の注意を引きつけることは出来ます」

赤城は眼前にいる戦艦棲艦や空母棲艦を中心とした強力な敵艦隊に向けて矢を放つ、艦載機に変化した数は通常時の半数にも満たないが、足止めには十分だ。

「行きなさい瑞鶴！これから先、あなたはこの事で様々な困難に遭うかもしれない、でもあなたは決してこの決断を後悔してはいけません！最期のその時まで、旗艦としての役割と責任を全うしたことを誇りに思いなさい！」

赤城のその言葉にハツとした瑞鶴は、改めて随伴艦の方を向き直り、言い放つ。

「赤城先輩を置いて撤退する、私に続きなさい」

「ハア!?ふざけないで下さい！」

「仲間を見捨てるんですか!?きつと何か出来ることが…!」

『旗艦命令』よ！足手まといのせいで轟沈したくなければ、私に続いて撤退しなさい！」

天龍と朝潮の反論をばつさりと切り捨て、瑞鶴は改めて随伴艦に命

令する。

「っ!!」

旗艦命令、その言葉がどれほどの力を持つかはこの鎮守府の艦娘であれば誰もがよく理解している、その言葉が使われればどんなに理不尽な内容の命令であろうと従わなければならないし、またそれを理解している瑞鶴自身も旗艦命令の発令には細心の注意を払い、余程の事がなければ使わない。

「……………」

随伴艦娘たちは何も言わず、瑞鶴を射殺するような目つきで睨みつつ撤退を始めた。

それを見た瑞鶴も続いて撤退しようとしたが、最期に一言だけ…と赤城は瑞鶴にだけ聞こえる声で言い残した。



「――――」

「…っ!!」

彼女の遺言とも言えるその言葉は、瑞鶴の心に一生消えることの無い心傷ききずとも呪いとも言えるような何かを、確かに刻み込んだのであった。

その後、瑞鶴たちはとてつもない険悪な雰囲気の中、無事に戦鬪海域からの離脱に成功した。

電探から赤城の反応が消失したのは、それとほぼ同じタイミングだった。

## 第2話 「瑞鶴の場合2」

「…以上が出撃中の出来事です」

帰投後、瑞鶴は提督室で今回の出来事を事細かに報告する、当然赤城を置いて行ったことも含め、詳細に。

「…分かった、ご苦労様、書面での記録も必要だから後で報告書の提出を頼む」

瑞鶴の報告を聞いた横須賀鎮守府提督、相模友則さがみともりは特段変わった様子もなく、いつも通りのやり取りをする。

「……あの、提督、今回のことは、本当に申し訳ありませんでした、どのような処罰でも受けますので…」

「何度も言わせるな、お前は旗艦として立派に役割と責任を果たした、誰かに責められるいわれはない」

「……………」

「そもそも旗艦命令制度なんてモノを作ったのは俺だ、お前が最善だと判断した結果が赤城の放棄なら、俺に異を挟む権利はない、それにその決断が簡単なものじゃなかったって事くらい、俺でも分かる」

「提督…」

「だからお前は毅然としている、自分の決断を後悔したら、それこそ赤城に対する侮辱に他ならない」

相模はそう言うと、今日は早めに休んで気持ちを整理しよう瑞鶴

に言い渡す。

「…ありがとうございます…ごいいます…」

瑞鶴は一礼して提督室を後にするが、最後までその表情は曇ったままだった。

「……………」

瑞鶴が立ち去ったのを確認すると、相模は机の引き出しを開け、中から写真立てを取り出した。

「…赤城」

そこには顔を綻ばせて笑っている相模と赤城が写っていた、特に赤城は左手薬指にはまっけているそれを見せるようなポーズを取っており、表情もどこか照れているように見える。

「…頼む、瑞鶴の事を…どうか見守ってやってくれ」

相模は祈るようにそう呟くと、再び写真立てを引き出しの中に戻し

た。



「…流石にもう広まってるか」

提督室を後にした瑞鶴は早速自分の下した決断に対する現実を目の当たりにする事となった。

廊下で他の艦娘とすれ違う度に自分を指さしてはひそひそと何かを言い合っている、自分が赤城を見捨てたことはすでに鎮守府中に広まっているらしい、赤城が帰投していないのだから当然といえば当然だが。

「これじゃあ毅然としていろって言われても、難しいかもね…」

瑞鶴は溜め息を吐きつつ食堂へと向かった、あんな事があつた後なので正直食欲は湧かなかつたのだが、何か食べなければ元気も出ないし気持ちも切り替えられない。

「って、そんなのは所詮言い訳ね、じっとしてたら自責の念に押しつぶされそうだから、無理にでも何かして切り替えたいだけなのに…」

瑞鶴は自嘲気味に口の端を少しだけ吊り上げて笑うと、カウンターにいる間宮に適当な軽食を注文する、間宮は瑞鶴の表情から何かを察したのか、同情的な視線を送ってくる、自分を理解してくれているように救われたような気になったが、同時にいたたまれない気持ちにもなった。

食堂にいた艦娘たちも同様に様々なリアクションを瑞鶴に向けてくる、指を指してひそひそと陰口を叩く者もいれば、赤城と仲の良

かった艦娘などからは怨嗟のこもった視線を向けてくる者もいる。

(こりゃ、あの人からは何されるかわかんないな…)

「瑞鶴…!」

そんな事を考えながら料理が出来るのを待っていると、食堂に見知った艦娘が入ってきた、青を基調とした弓道着をまとい、セミロングの黒髪をサイドテールにまとめた艦娘…正規空母の加賀だ。

(早速お出ましか…)

加賀はかなり興奮しているのか、呼吸は荒く見るもの全てを射殺しそうな勢いの鋭い眼孔を瑞鶴に向けている、怒っているのだという事は誰の目から見ても明らかだった、理由は十中八九あの事だろう。

「加賀先輩…」

瑞鶴は気まずそうに目を逸らすが、すぐに思い直して加賀に視線を戻す、加賀は瑞鶴のもとへ向かうや否や胸倉を付かんで勢い良く詰め寄った。

「どうして…!どうして赤城を見捨てたのっ!」

加賀はそうシンプルに問いただした、赤城と加賀はほぼ同じ時期に横須賀鎮守府に所属した同期で、当時はまだ航空戦力が十分といえなかった主力艦隊を支え続けた、言わば掛け替えのない戦友とも言える存在だった。

そんな赤城を瑞鶴が見捨てたと聞いたときは流石の加賀も耳を疑った、きつと何かの間違いだ、あの赤城が轟沈したなど、きつと何

かの…何かの…。

「先輩…」

怒り、悲しみ、絶望、そんな色々な感情がない交ぜになった目で見つめられ、瑞鶴は胸が締め付けられるような気持ちになる、しかしここで自分が折れてはいけない、自分たちを守って轟沈した赤城のためにも、そして何より旗艦としての責任を果たすためにも、毅然としていなければならぬ、あの決断だけは後悔してはいけないのだから…。

「赤城先輩は大破により自力での航行は不可能、自分含め他の随伴艦も大破ないしそれに近い中破、そして敵艦隊の戦力も自軍より格上だった、そんな状況下で赤城先輩をみんなで庇いながら撤退するのは無理だと判断して、赤城先輩を置いていきました」

瑞鶴は提督にも話した当時の状況を加賀に説明した、淡々と、事実だけを述べるように…。

「そんなの…！旗艦のあなたがもつと何か考えれば別の手があったかもしれないでしょう！それに赤城が艦隊のみんなにとって、特に提督にとってどれほど大切な存在だったか…！」

「分からないんですか!?あの時の赤城先輩は足手まといだったから置いていったって言ってるんですよ！それが分からない加賀先輩じゃないでしょう!？」

つい、本当について反射的に口から出てしまった言葉だった、口にした瑞鶴本人もハツとした顔になるがもう遅い、今の加賀にとってその言葉は禁句にほかならなかった。

「っ!？」

刹那、顔に強い衝撃が走って視界が大きく揺れ動く、それが加賀に殴られたのだという事にすぐには気づかなかつた。

「あなたの…！あなたのせいで赤城が！」

倒れた瑞鶴に馬乗りになった加賀がさらにもう一発入れようとしたとき、加賀の振り上げた手が止められる。

「もう止めなさい」

振り返ると、1体の艦娘が加賀の腕を掴んでいた、サラサラの長い銀髪を揺らし、裾の短いドレス風にアレンジされた鎖帷子くさりかたびらを身に纏っている、金剛型戦艦の金剛だ。

「…少し頭を冷やした方がいいわ、あなたは正常な判断が出来ていない、今のこの状況がその証拠よ」

金剛は冷静な口調で加賀を諭す、加賀も少し熱くなりすぎたのを自覚したのか、そそくさと瑞鶴の上から退くと、食堂を出て行ってしまった。

「大丈夫だった？」

金剛は屈んで右手を差し伸べ、瑞鶴を引っ張り起こす。

「…すみません、ありがとうございます、金剛さん」

瑞鶴は引っ張られながら申し訳無さそうに言う、殴られた頬はまだ痛んでおり、時折スキズキと刺激が神経に痛覚として訴えかける。



「いいのよ、それよりさっきのアレ、言い方としてはあまり感心しないわね?」

「…自分でもあんな言い方をするつもりは無かったですけど、気が付いたら口から出てて…」

金剛がジトつとした視線を向けながら指摘すると、瑞鶴は肩をすくめて縮こまる。

「…あまり気負わない方がいいわよ、こんな事気安く言えないのは分かっているけど、あなたが旗艦として色々な苦勞をしていることも、時にはそういう決断が必要になるって事も、理解してるつもりだから」

「…ありがとうございます、でも…どれだけ言葉で取り繕っても、私が赤城先輩を置いていった事実は変えられませんから…」

瑞鶴はそう言つて金剛に軽く礼をすると、出来上がったサンドイッチを持って食堂を後にした。

「…思いつめなきやいいんだけどね」

金剛は心配混じりに溜め息を吐くが、その心配に近い未来現実となることに、この時はまだ気づくよしもなかった。

### 第3話 「瑞鶴の場合3」

一切の光の存在も許されない暗闇の中を、瑞鶴はただひたすらに走っていた。

その暗闇はどこまでも果てしなく続いており、どこへ進んでいるのか、本当にどこかへ進んでいるのかという疑問を抱かせる。

なぜ自分はこんな所にいるのか、自分はどこへ向かおうとしているのか、そもそもなぜこんなに焦燥感に煽られて走っているのか、いくら考えても答えは出てこなかった。いや、とつくに出てはいるはずなのに脳がそれを認識することを拒んでいる…といった所だろうか。

「うわっ!？」

その時、瑞鶴は何かに足を取られて転んだ、一体何が、と瑞鶴は足元を見る。

「ひいっ!？」

そこにはおもちゃのスライムを思わせるゲル状のモノが絡まっていた、そのスライムは深海棲艦の装甲のような色をしており、まるで新種の深海棲艦のようであった。

スライムは瑞鶴の足を這うようにせり上がり、瑞鶴の身体を覆い尽くそうとしてくる。

「止めろー！来るなあー！」

瑞鶴はスライムを引き剥がそうとするが、スライムはそれに抵抗するかのようにさらに複雑に絡みつき、その一部が瑞鶴の口の中へとね

じ込まれる。

「っ!？」

あまりの出来事に瑞鶴はパニックになる、スライムに味の類は感じなかった（感じる余裕が無かったのかもしれない）が、何とも言葉では言い表せない不快感が瑞鶴を襲う。

『ず…い…か…く』

「っ!!」

すると、先ほどまで不定形でしかなかったスライムがいつの間にかやらの上半身のような形を形成しており、自分の名前を呼んでいた。

(…う…そ…)

瑞鶴はその声を聞いて、その姿を見て目を剥いた、何故なら…

『瑞鶴…どうして…私ヲ…』

『オイテイツタノ…？』

その声は、その姿は、あの日沈んだ赤城そのものだったのだから…



「…ハッ!？」

瑞鶴は勢い良くベッドから飛び起き、慌てて周りを見渡す。

「…夢…?」

汗だくになり、呼吸も荒い状態で瑞鶴はさつきまでの夢の内容を思い返す。

「うっ…!」

その瞬間、夢の中で赤城のスライムに体内を弄られた時の感覚がフラッシュバックし、猛烈な気持ち悪さと吐き気に襲われる。

「オヴオええ…」

瑞鶴は猛ダッシュでトイレに駆け込み、胃の中身を全てぶちまける、昨日食べたモノはほぼ全て消化されており、出てくるのは僅かな胃液だけ、それが余計に瑞鶴をえずかせる。

「つたく…とんだところで再会したわね、赤城先輩…」

瑞鶴はそんな自虐的なおふぎけを呟くが、トイレから出てこられるようになったのはそれからしばらくしてのことだった。



「ず、瑞鶴さん…？なんだか少しやつれてるような気がしますけど、大丈夫ですか…？」

「ええ、大丈夫よ、少し夢見が悪かっただけ」

間宮が瑞鶴の顔色を心配しながら朝食のトレーを渡すが、瑞鶴は適当にごまかしてトレーを受け取る、何せあんな夢を見た上に胃の中をリバースし、いつもの起床時間より1時間以上早く起きてしまったのだ、朝っぱらから精神的疲労MAXである。

「…今日の出撃大丈夫かな、まだ少し頭がぼーつとするし眠いし…」

最悪別の艦娘に変わってもらおうか…などと考えていたとき、金剛が瑞鶴の前に座る。

「おはよう、何だか顔色が優れないみたいだけど、大丈夫なの？」

金剛は間宮同様瑞鶴の顔色が優れない事にずくに気づき、心配そうに顔を覗かせる。

「いや…何だかあまり眠れなくて、少しぼーつとしちゃいました…」

「…そうよね、昨日あんな事があつたばかりだものね、何なら今日の出撃任務の旗艦、私が変わるわよ？他の空母艦娘にも声をかけてみるけど…」

「いや…流石にそこまでしてもらうのは…」

瑞鶴は申し訳無さそうに首を横に振る、確かに出撃任務にあたって

万全のコンディションでないのは確かだが、本を正せば自分に責任があるため、金剛の好意に甘えづらい。

「全く、朝からいい御身分ね」

すると、朝食のトレーを持った加賀が瑞鶴たちの側に立ち、射抜くような冷たい視線を向ける。

「あなたが赤城を見捨てたせいで航空戦力に欠員が出てるのよ、その分主犯のあなたが頑張るべきなのに寝不足で休むなんて、甘いんじゃないかしら？」

「加賀先輩……」

加賀の淡々とした言葉の羅列に瑞鶴は縮こまりそうになる、加賀の言っていることは瑞鶴ももちろん理解しているし、赤城の分まで自分が頑張らなければならないというのも分かっている、しかしこうして面と向かって、しかも加賀から言われてしまうと心に来るモノがある、あの悪夢を見た後なら尚更だ。

「……ちよつと加賀、それは言い過ぎよ、瑞鶴がどれだけの思いであの決断をしたか……」

「金剛、あなたは瑞鶴の決断を随分と美化しているようだけど、赤城を見捨てたのは結局は瑞鶴の旗艦としての能力が足りなかったからよ、赤城を助けられるだけの工夫を凝らしきれなかったあなたの力量不足、だからあなたは赤城を見捨てた、違う？」

「加賀……あなたね！」

金剛は加賀に掴みかかる勢いで食ってかかったが、瑞鶴はそれを片

手で制した。

「…加賀先輩の言うことはもつともだと思っています、でも私はあの決断が間違っていたとは思っていませんし、後悔もしていません、これだけは何があっても曲げるつもりはありません」

瑞鶴は加賀の目を見てはつきりと伝える、それを聞いた加賀は特に表情を崩すことは無かったが、やがて溜め息をひとつ吐き…

「…あなたの事を旗艦に相応しい優秀な艦娘だと思っていたけど、買い被りだったみたいね」

そう言い残し、瑞鶴たちから一番遠いテーブルの席に着いた、その様子を一部始終見ていた他の艦娘たちは内心ハラハラしていたが、すぐにいつもの談話モードに戻っていった。

「気にすること無いわよ瑞鶴、加賀は赤城を失って気持ちの整理ができてないだけ、そのうち分かってくれるわよ」

「…だといいですけどね」

瑞鶴たちは席に座り直して朝食を再開したが、加賀から言われた言葉は瑞鶴の心にトゲのように刺さり続けた。



#### 第4話 「瑞鶴の場合4」

何とも微妙な気まずさの残る朝食を終えた瑞鶴は出撃任務へ向かう、やはり自分が変わろうか…と金剛は申し出たが、出撃に支障が出るほどではないから大丈夫だと言って断った。

しかし旗艦は艦隊にとって重要な指令役、本来であれば大事を取って休むべきなのだろうが、加賀からああ言われた手前休みづらかった。

それに艦隊行動に重大な支障が出るほどの不調ではないのも事実なので、今日の任務をこなすくらいなら大丈夫だろうと瑞鶴は思っていた。



「…はあ」

そして現在、瑞鶴は自室のベッドに寝転がり、何度目か分からないため息を吐く。夕食を食べ終えたすぐ後なので、食べてすぐに寝転

がると牛になる」というジョークを思い出したが、そんな事どうでもいいとばかりに落ち込んでいた。

件の出撃任務だが、結果から言えば『随伴艦多数大破による途中撤退』というのが嘘偽り無い内容である。原因の半分は大丈夫だろうと瑞鶴が判断した寝不足だ、それ自体は深刻なものではなかったのだが、結果としてそれが瑞鶴のとっさの判断能力を鈍らせ、全体の艦隊行動に影響を及ぼした。

「旗艦としては最低の結果だよ…」

瑞鶴はごろんとベッドの上で寝返りを打ち、またため息を吐く。彼女がこうも落ち込んでるのは撤退により任務を完遂できなかったからではない。

今回は自分に原因があるが、それを差し引いても旗艦や随伴艦の大破、あるいは何らかの原因で出撃中の航行が不可能になった場合などで途中撤退の判断を下すことはままある。

別にそれらは艦娘の命を第一に考える旗艦の立場からすれば間違った判断ではないし、今回の撤退判断も相模から咎められる事はなかった。

「…流石にあんな風に言われたら…へこむよ」

それ以上に瑞鶴の心を抉ったのは、随伴艦の艦娘たちの表情や態度だ、出撃開始から帰投まで終始落ち着かない様子で瑞鶴の顔を時折うかがってはボソボソと何かを言い合っていた。

『あまりへマをしたら見捨てられる』

そしてそれはほんの偶然聞こえてきた言葉だった、赤城轟沈の件以来鎮守府の艦娘たちが揃って噂していたため、そういう風に思われていること自体は瑞鶴も何となく知っていた。

しかしこうして同じ艦隊内での出撃中に言われるとなると感じる言葉の重みがまた違ってくる、もちろん瑞鶴に随伴艦娘を見捨てるつもりは毛ほども無かったが、いざすぐ後でささやかれると言葉が心にまとわりつく。

そんな随伴艦娘たちの不安から来る注意力散漫が大破を出した原因のもう半分である。とはいえこうなったのも元を辿れば自分に原因があるので結局元凶は自分だが。

そして決定的だったのは大破したときの睦月の言葉…

『お願いします！見捨てないでください！』

これを号泣しながら言われたのだからたまったものではない。他の艦娘も同じ事を考えていたようで、同様に大破していた三日月と古鷹からも睦月ほどではないが必死に懇願去れたときは流石に頭こぶを垂れた。

「やっぱりしばらく休んだ方がいいのかも…」

そんな事を考えながら瑞鶴はぼーっとベッドに寝ころんでいたが、いつの間にか眠ってしまっていた。



「いやああああああ！来ないで！」

自分以外の全てが切り離された暗闇の世界で、瑞鶴はまたもがいていた。足下には鈍色のスライムがまとわりつき、瑞鶴の身体を支配しようとする音が響いてくる。

しかしどうあがいてもこのスライムに抵抗できないことを瑞鶴は知っている。経験がある人ならば分かるかもしれないが、物心付いたときから定期的に同じ内容の夢を見ることがある、その夢の内容は細かい部分で差異があるかもしれないが、大筋の内容と結末…つまり夢から覚める部分は変わらない。

しかもその夢の中で「前に見た夢だ」ということを認識できたとしても、何故か夢の内容に干渉することは出来ない、まるで予め定められた演劇の物語のように…こちらの意志とは関係なく夢の中の住民たちは同じ軌跡を辿り続ける。

スライムは瑞鶴の下半身全体を覆い尽くした後、口の中から侵入して体内を侵蝕していく、これも瑞鶴がどれだけ抵抗しても防ぐことが出来ず、身体の中を引つ掻き回されるような猛烈な不快感が全身を襲う。そしてその時に決まって聞こえてくるのが…

『瑞鶴…どウシテ…』

『オイテイツタノ…?』

赤城の悲しむような、あるいは恨めしいようなあの声だ。

◇

「っ!？」

瑞鶴は勢いよくベッドから飛び起きると、息を弾ませて辺りを見回す、時計を見ると午前1時半を少し過ぎた頃だった。

「…そっか、あの後寝ちやってたんだ…」

瑞鶴がそう呟いたとき…

「うっ…!」

スライムに体内を侵蝕されたときの感覚がフラッシュバックし、猛烈な吐き気に襲われる。

瑞鶴は慌ててトイレに駆け込み、胃の中身を思い切りぶちまけた。

「はぁ…はぁ…はぁ…はぁ…赤城先輩、文句言いに来るならスライムじゃないくて普通に来てくださいよ…」

瑞鶴はゲホゲホとえずきながら軽口を叩くが、侵蝕時の感覚が中々抜けず、しばらくトイレに籠もることになった。

◇

それから一週間が経ったが、瑞鶴は依然としてあの夢を毎晩…いや、眠る度に見続けていた。その度に飛び起きてはトイレに駆け込むという、考え得る限り最悪なルーチンワークというおまけつきだ。

「…そうか、そんなことが…」

「ええ、なのでしばらくの間お休みをいただけじゃないでしょうか、こうも寝不足での出撃が続けば艦隊行動に深刻な影響が出るかもしれない、私だけならともかく、随伴艦娘の命がかかっているとすれば尚更…」

瑞鶴は相模に事情を話し、臨時休暇の相談を持ち掛けていた。その目元には睡眠不足を主張する隈が浮かんでおり、現状があまり良くないことを表している。

寝不足での出撃はこの一週間で少しずつ慣れてきてはいる（本来であれば望ましくないことだ）が、やはりそれに伴う旗艦艦娘としてのパフォーマンスは目に見えて低下しており、これ以上は危険と判断した。

「分かった、しばらくの臨時休暇を許可しよう、旗艦の代役はこちらで調整しておくから、ゆっくり休むと良い」

相模は“寝不足”を理由に休みの申請をした瑞鶴に怒るわけでも

なく、むしろどこか申し訳なさそうな表情でそれを許可した。

「…すみません、自業自得による結果であるにも関わらず、身勝手なお願いを…」

瑞鶴がそう言つて頭を下げようとするが、相模は右手を挙げてそれを制する。

「それ以上は言うな、お前は休むことだけ考えればいい」

相模からそう言われた瑞鶴は謝罪とお礼、ふたつの意味で礼をする  
と、提督室を後にした。

「…今日もまたあの夢を見るのかな、だとしたら眠りたくないなあ…」

またあの赤城スライムに襲われて、身体と脳を支配され、そしてト  
イレに駆け込む、考えただけで憂鬱になる。

「…あんな夢、早く見なくなればいいのに」

瑞鶴はそんな愚痴を言いつつ廊下を歩くが、ふと足を止めて考え  
る。

もしその夢を見なくなったら、自分の中から赤城を見捨てたという  
罪の意識が消えてしまうという事なのではないか？。

罪の意識が消えてしまうということは、あの時赤城から言われたことやそれに対する自分の決意、それら諸々が自分から失われてしまうのではないか？。

「…だったらいっそ、このままでも…」

すり減っていく心と寝不足で足りなくなっている頭が、瑞鶴をありもしないネガティブの崖下へと容赦なく突き落とす。



## 第5話 「瑞鶴の場合5」

「…瑞鶴、ちよつといいかしら」

呼び止められた瑞鶴が振り返ると、そこにはかなり不機嫌そうな加賀がいた、理由は十中八九「あの事」だろう。

「提督から要請があつたわ、あなたがしばらくお休みするから私に旗艦を任せたいって、あんな事があつて間もないのに本当に休むなんて、いいご身分ね」

案の定と言うべきか、加賀は瑞鶴にネチネチと文句を言ってきた。とはいえ旗艦という少々面倒な仕事を押し付けられたら事に対する文句などではなく、単に赤城の件を引きずった八つ当たりに近い内容であつた。

「…すみません、少し身体の調子が良くないんです、艦隊行動に重大な支障が出る前に万全にしておきたくて…」

「全く…体調管理もろくに出来ない上に私に旗艦を押し付けて自分のはのんびり休む、本当にいいご身分なことだ」

依然と続く加賀の文句に瑞鶴は無意識のうちにイライラを募らせていた、もちろんこんな感情を抱くことは筋違いも甚だしい事くらい瑞鶴にも分かっていた。

「…すみません、数日中には何とかしますから…」

瑞鶴はそう手短に言うと、その場から逃げるように足早に去っていった、あのままここにいたら間違いなく加賀に当たってしまう、それを自分が一番よく分かっていた瑞鶴は一刻も早くここから離れた

かった。

「何なのよ、もう…」

その様子が少しおかしいと感じ始めた加賀だったが、今の加賀にそれ以上思考を進めることは出来なかった。

◇

「…ふう、旗艦も楽しじゃないわね」

出撃任務からの帰投後、補給と修復を済ませた加賀はコキコキと肩を鳴らしながら食堂へ向かっている。夕食には少し早い時間なので待つことも考えたのだが、執拗に空腹を訴えてくる腹の虫の声に根負けし、足を運ぶことにした。

(それにしても、まさかあんなにみんながビビってるとは思わなかったわ)

加賀は歩きながら今日の出撃中の出来事を思い出す、相模からある程度のあらましは聞いていたが、随伴艦娘は赤城の件をまだ引きずっていた、流石に瑞鶴の時ほどではなかったが、やはり内心は不安に感じているようだ。

「二応、『あなたたちのことは絶対に見捨てない』って言って安心させておいたけど、どこまで効果があるか…」

加賀は溜め息を吐きながら食堂へ入る。

「…ん？あれは…」

時間が時間な為か、食堂には艦娘が少なく、食事より談話目的で居る艦娘の方が多いようだ。その中で瑞鶴がテーブルに突っ伏して寝ているのが目に入る。

「全く…寝るなら自分の部屋で寝ればいいのに、出撃でへとへとになつて帰つてきた私への当て付けかしら」

そんな愚痴をこぼしつつ、加賀は瑞鶴の隣へと座る、こんな所で寝ていてはいずれ食事目的でやつてくる艦娘たちの邪魔になりかねないし、なにより具合が優れないならこんな所よりも自室で寝た方が回復も早いだろう、そう思い加賀は瑞鶴を起こそうと揺すり動かしながら話しかける。

「瑞鶴、起きなさい、こんな所で寝てないで、部屋に行きなさい」

加賀は何回か軽く声をかけて揺するが、起きる気配は無かった。

「もう…どうしたものかしら…」

いつそ起きるまで放つておこうか、とまでかんがえたとき、加賀があることに気づいた。

「…ん？もしかして、うなされてる…？」

よく見ると額には脂汗が浮かんでおり、何かに苦しむようにうなり声をあげている、悪い夢でも見ているのだろうか。

「瑞鶴、瑞鶴、大丈夫？起きなさい」

どんな夢を見ているかは知らないが、このまま放置しておくのはよろしくない判断した加賀は無理矢理にでも起こそうと強く瑞鶴の

身体を揺する。

「…はっ!？」

それからさらに何回か声をかけては揺するのを繰り返した時、瑞鶴が突如目を覚ましてガバツと顔を上げ、キョロキョロと辺りを見回した。ダラダラと汗を流し、顔色もかなり悪い、よほど恐ろしい夢だったのだろうか。

「やっと起きたわね、随分うなされてたようだけど…」

「うわあああああああああああああ  
!!!!!!!」

瑞鶴が加賀を視界にとらえた途端、まるで幽霊でも見たような顔になって叫び声をあげた、その際に後退ろうとしてイスから転げ落ちたが、それでもなお加賀から距離を取ろうとしている。

「ちよ、ちよつと瑞鶴…?…いきなりどうしたの…?…」

突然の出来事に加賀は困惑しながら瑞鶴を見る、汗塗れの真っ青な顔は何かにひどく怯えるような表情をしており、パニックになったせいか息を弾ませている。

「うえ…?…加賀…先輩…?…」

すると瑞鶴は幾ばくか落ち着きを取り戻したのか、目の前にいる存在が加賀なのだと改めて認識したような言動をする。

「そうよ加賀よ、本当にどうしたの…?…」

明らかに尋常ではない状態の瑞鶴に加賀はそろそろ本気で心配し

始める、周りの艦娘たちも突然大声をあげた瑞鶴を驚いた様子で見つめていた。

「取りあえず身体を起こすのを助けた方が良さそうだ、と加賀は手を差し伸べようとするが…」

「っ!!うおぶ…!おえええ…」

瑞鶴が口元を抑えてうずくまった直後、手の隙間から吐瀉物がボタボタと溢れ出した。

「っ!?!瑞鶴!?!どうしたの!?!」

突然嘔吐した瑞鶴に加賀は慌てて駆け寄って背中をさする、周りの艦娘たちはひえっ…と驚きと困惑の声をあげながら固まってしまい、誰一人としてその場から動けずにいた。

「…すみません、大丈夫です…大丈夫ですから…それより、床拭かないと…」

ゲホゲホっ!とせき込みながら瑞鶴はまるで自分に言い聞かせるように大丈夫だと言い張り、掃除道具を取りに行こうとする。

「馬鹿な事言うんじゃないわよ!今のあなたの『大丈夫』を聞いて誰が『はいそうですか』って納得すると思ってるの!…とにかく一緒に医務室に来なさい!片づけはやらせるから!」

そんな瑞鶴を加賀は怒鳴りつけ、肩を貸して立ち上がらせる、今の瑞鶴の状態が異常だということは誰が見ても明らかだった。

「あなたたち!悪いけど後始末をお願い!三日月たちは提督にこの事

を報告！金剛たちは床掃除！」

「わ、分かりました！」

「了解、一応ノロウイルス対策で消毒諸々やっておいた方がいいわね」

加賀の有無を言わせぬ指示で三日月、ジャービスは食堂を飛び出し、金剛、磯等、霧島、閑野は掃除の準備を始める。

「…すみません、こんな事で先輩に迷惑を…」

「いいから、今は何も考えずに身を預けていなさい」

未だに謝罪の言葉を呟く瑞鶴をピシヤリと黙らせつつ、加賀は瑞鶴を半ば引きずる形で医務室へ連れて行く。

（…よく見ると本当にひどいわね）

その途中で瑞鶴の顔をちらりと見たが、その表情は憔悴しきっており、心身共に弱っていることは容易に見て取れた。

（…いったいあなたに何が起きてるっていうの…？）

瑞鶴を運んでいる最中、そんな事をずっと考えていた加賀だったが、自分も僅かながら瑞鶴を追い詰めた原因になっているということに、この時の加賀は気付いていなかった。

## 第6話 「瑞鶴の場合6」

「それじゃあ薬を持ってくるから、戻るまでしばらく横になっていな  
さい」

「…はい」

加賀に介抱されながらなんとか自室に戻ってきた瑞鶴はベッドに横たわり身体を預ける。ふう…と息を吐くとすぐさま疲れがどつと身体に押し寄せ、重りを乗せられているような気分になる。

「…バレちゃった…よね」

瑞鶴はそう言つて手の甲で目元を覆う。さっきの食堂での一件で自分が明らかな異常事態に見舞われているというのは加賀も気付いたことだろう、多分戻ってきたときには事情を聞かれるに違いない。

知られなくなかった。それが瑞鶴の率直な感想だった。今の状態は赤城の一件での選択が招いたことだ、当然それに伴って起きたことは自分の責任であるし、自分でけじめを付けなければならぬ。他の艦娘…ましてや加賀に今の状況を吐露して弱音を吐くなどもつてのほかだ。そう思っていた。

「…加賀先輩、今の私の状態を見て何て思うのかな」

そんな一抹の不安にかられながら、瑞鶴は疲労感と体の重みに身を任せてベッドに横たわっていた。



「はい、ゆつくりと飲んで、それと何かお腹に入れた方がいいから、これも」

「…ありがとうございます」

それから5分後、加賀が持ってきた薬を白湯さゆで流し込むと、食堂で間宮に作ってもらってきた雑炊を口に含む。

「食器は後で取りに来るから少しずつ食べなさい、食べた後はもう少し寝ていた方がいいわ」

「…はい、ありがとうございます」

そう瑞鶴に言う加賀の表情や口調はここ数日間の憎悪の込められたモノではなく、瑞鶴が知っている加賀本来の優しさに溢れてたモノだった。いくら状況が状況とはいえ、急な変わりように少し戸惑いながらも瑞鶴は雑炊を食べ進める。

「……………」

それを加賀はどこかそわそわと落ち着かない様子で見ている。まるで何かを言い出そうとしてるが口に出すのをはばかれる、そんな感じだ。

「…気に…なってるんですね、さっきのこと」



それを嫌でも感じ取った瑞鶴は自分からそう話を切り出す、どの道聞かれるだろうと覚悟していたことだ、変に誤魔化すとかえって拗れるだけだろう。

「っ!!…ええ、まあ…」

それを聞いた加賀は珍しく歯切れの悪い、ぼつの悪そうな表情を浮かべる、加賀自身もあまり触れない方がいいと思っていたらしい。

「この際だから聞かせてもらうわ。瑞鶴、一体あなたに何が起きてるの?急に具合が悪くなったと言って休みをもらったと思えばさっきの一件…どう考えても異常よ」

すでに見透かされているなら、と加賀はストレートに疑問を瑞鶴にぶつける、はつきり言って加賀も辛辣な態度で瑞鶴を追い詰めていたため、この状況を作り出した発端の一部と言えなくもないのだが、さすがにそれを言うのは野暮だろう。

「…実は…」

年貢の納め時か…。そう思いながら、瑞鶴はあの日から今日までの事を話し始めた。



「…以上が、今の私に起きていることです」

全てを話し終えた瑞鶴はふう…と小さく息を吐く。赤城を置いていったあの日の心境や毎晩のように見る悪夢、そしてそこに現れる赤城の幻。さらにそれが原因の寝不足や体調不良。時間にしてそう長

くは経っていないはずだったが、話し出しにくい内容だったのもあり、随分と長く感じた。

「……………」

自分は今まで、瑞鶴の何を見ていたのだろうか。

そんな事を思いながら、加賀は自分自身への怒りを沸かせながら両手の拳を握る。

赤城は加賀と共に瑞鶴の指導を担当した先輩であり師匠だ。艦載機の扱いを何も知らなかった状態からずっと瑞鶴の面倒を見ていた赤城は彼女にとってとても尊敬できる先輩であり、姉貴分である。

そんな赤城を放棄して撤退するなどという決断を、瑞鶴が何の気も無しに出来るわけがない。きつと胸は張り裂けそうになり、心は大きく抉られるような思いだっただろう。

考えればすぐにわかることだった、赤城と共に瑞鶴の指導をして面倒を見てきた、赤城と同等の尊敬と信頼を向けられていた加賀ならなおのことだ。

「……ごめんなさい」

だが、自分は分かってやれなかった。赤城を喪った喪失感や悲しみ、そして本来抱くべきではない瑞鶴への怒り。それぞれの感情がなймаぜになって加賀の心の目と耳に蓋をし、本当なら一番辛いはずの瑞鶴の悲痛な心の叫びを、助けて欲しいと差し伸べてきた心の手を、加賀は自分で払いのけてしまったのだ。

「ごめんなさい瑞鶴…あなたのこと、何も分かっていなかった。いいえ…本当は分かっていたはずなのに、赤城を喪った悲しみを盾にして、あろう事かあなたに当たって追い詰めてしまった…。本当にごめんなさい…」

加賀はポロポロと涙を流しながらごめんなさい、と懇願するように呟いた。本当なら自分が一番瑞鶴の側にいて支えにならなければいけないはずなのに、逆に瑞鶴の心を追い詰めて壊してしまう所だった。そんな自分が許せなくなる。

「…謝らないでください、私が赤城先輩を置いていったのは事実ですし、それに伴って起きたことは、ちゃんと自分ではじめを付けないとって…」

「…もう、いいから」

瑞鶴が言い終わる前に、加賀は瑞鶴を抱きしめてそう言った。

「もう無理をしなくていいから、辛かったら私に頼って良いから、いくらでも私に弱音を吐いてもいいから、だから…もうひとりで抱え込もうなんて思わないで…」

「加賀…先輩…」

「これからは私があなたを支えるわ、あなたはもうひとりじゃない、私が付いてる」

加賀は瑞鶴をまっすぐに見つめてそう言った、その目には今までのネガティブな感情は無く、しっかりとした意志が宿っている。

「…うう…先…輩…」

気付けば瑞鶴は嗚咽を漏らしながら泣いていた、それは瑞鶴が心のどこかでずっとかけて欲しいと思っていた言葉だった。だが自分にその言葉をかけてもらえる資格は無い、そんな思い込みがいつの間にか瑞鶴の心を凍り付かせていた。今の加賀の言葉は、瑞鶴の凍った心を溶かすのに十分すぎるくらいに暖かった。

「……………っ!!」

そこからはもう止まらなかつた、今まで心の内側で抱え込んでいた

ネガティブなドロドロの感情を全て加賀に向けてぶちまけるように泣きじやくった、そんな瑞鶴を加賀は何も言わずに抱きしめ、受け入れたのだった。



『…いらっしやいませ、先輩。来るならどうぞ早く』

瑞鶴は感情の一切合切を放棄したような声で目の前の赤城スライムに対して言う。ここはいつもの夢、自分が何をしても夢の結末は変えられない、いつものようにこの赤城スライムが身体を侵し、彼女の怨念に似た感情やら声やらが脳を支配する。

いや…本当はとづくに分かっていた、この赤城スライムは自分の認知によって生まれたモノ、赤城は自分に対してこう思っているかもしれない…いや違う、ッこうでなくてはいけない”という自分がどこかでそう思い込もうとしていたモノだ。

だが、そんなことはもうどうでもいい、どの道この悪夢から逃れられないのなら、あとはそれを受け入れて、一秒でも早くこの悪夢が終わるように身を委ねる。そんな事を考えてしまうほどに夢の中の瑞鶴は疲れ切っていた。

赤城スライムは依然として瑞鶴に恨み辛みの言葉を呪詛のように呟きながら瑞鶴の中へ侵入しようとしてくる、あとはこれに耐えればいずれは終わる。

そう思っていた…

『っ!?!』

その時、どこからともなく光に包まれた人影のようなモノが瑞鶴の前に現れる。シルエットのようになっていたので誰なのかは分からないが、瑞鶴はとても見覚えがあるような懐かしさを感じた。

『失せなさい』

その光は瑞鶴を守るように赤城スライムの前に立ちはだかると、赤城スライムは人影の光を嫌がるように後ずさりし、遂には消えていった。

『もう大丈夫よ』

そうやって光の人影は手を伸ばして瑞鶴の頬をそつと撫でる、その手は春の日差しのようにとても暖かかった。

ああ…そうか。この声は…

『加賀…先輩』

「…んろう…？」



夢の世界から戻ってきた瑞鶴はゆっくりと目を開けて首を左右に動かす、時計を見るとすでに日付が変わっていた。

(そっか…あの後泣き疲れて…)

瑞鶴が記憶の糸を辿っていると、不意に隣から人の気配がした。

「ん…？」

身を少しだけ起こして右を向くと加賀が隣で眠っていた、どうやら自分を心配して一緒に眠ってくれていたらしい。

「…そっか、だからあの時…」

気付けば加賀は瑞鶴の手を握りながら眠っていた。あのときの光はきつと加賀なのだろう、加賀の瑞鶴への思いが悪夢から守った…などというのは都合のいい思い込みなのかもしれない。所詮夢は夢と言われればそれまでだが、夢なのであれば都合のいい解釈をしても誰も文句は言うまい。

「…ありがとうございます、先輩」

瑞鶴はそう呟いて加賀にお礼を言うと、もう一度布団に入り直し、再び眠りに落ちる。

次に瑞鶴が目を覚めたのは日が昇ってからであったが、あの悪夢を再び見ることは遂に無かった。



## 第7話 「瑞鶴の場合7」

「おはよう瑞鶴、今朝はどうだった？」

少し遅めの朝食を取ろうと瑞鶴が食堂に向かうと、加賀がコーヒーを飲みながら声をかけてきた。どうやら自分が来るのを待っていてくれたようだ。

「おはようございませ先輩。はい、特にうなされることもなく起きられました、すみません、あんな事をさせてしまって…」

夕べの添い寝の事を思い出しながら瑞鶴は恥ずかしそうに言う。

「気にしなくて良いわよ、むしろあれで悪い夢を見なくて済むのならしばらくあなたの部屋に転がり込もうかしら」

「えっ…!? さ、流星にそこまでさせてしまうのは…」

慌てたようにまごつく瑞鶴を加賀は悪戯っぽい笑みを浮かべて見ている、冗談めいた言い方だがルームメイト自体は割と本気で考えてくれているようであった。

「先輩、私早速今日から旗艦任務に戻ろうと思うんです」

「もう…？ もう少し休んでいた方が良いんじゃないかしら？ 旗艦は私がつっかり代理をやっておくから…」

「いえ、いつまでも甘えてのんびり休んでいるわけにもいきません、それに旗艦は重い責任がつきまとう重要な任務です、それをいつまでも先輩に押し付けるなんて事は出来ません、それにせっかく夢を見ずにすっきり目覚められたんですから、お役目はしっかり果たさないと」

「押し付けだなんてそんな…本当に大丈夫だから…」

旗艦としての責任感か、それとも加賀に対する罪悪感なのか、早く旗艦任務に戻らなければと焦るような雰囲気を見え隠れさせる瑞鶴を思いとどまらせようと加賀は頭を回す。

瑞鶴はまだ戦線に戻るべきではない、訓練程度なら復帰しても平気だろうが、せめてあと2〜3日は出撃任務は休むべきだ、瑞鶴の現状を知っている加賀ははっきりそう断言できた。

「いいんじゃないっすか？瑞鶴さんがそう言ってるんなら」

一体どうしたものかと考えていると、『あの日』の出撃でメンバーに加わっていた天龍と鈴谷が瑞鶴たちの所へやってきた。

「最近ずっと瑞鶴さんオヤスミしてたし、そろそろ旗艦に戻ってもらわないと、赤城さんを見捨てた張本人のクセに自分だけ現実から逃げみたいにおヤスミなんか取っちゃって、ちよつと調子乗ってるなって思ってたのよね〜」

「そうそう、旗艦だからっていい気になってもらっちゃ困るぜ？」

ネチっこく嫌みを言う2体に瑞鶴は軽く目を逸らすだけで何も答ええない、下手に反論して話を拗れさせないようにしているのだろうか。

「あなたたち…!!」

その時、加賀が勢いよく立ち上がって天龍と鈴谷に食ってかかろうとしたが…

「問題ないわ、今日からちゃんと旗艦任務に戻るもの、むしろ私が旗艦だからってバックレるんじゃないわよ」

「へッ！それはあんたの態度次第だね、旗艦様」

天龍はそう言い捨てると、鈴谷と共に食堂から出て行く。

「…気にすること無いわ、提督には私から進言しておくから、あなたは…」

「いいえ、天龍たちにはああ言ってしまうましたから、もう引けません」

加賀は再び瑞鶴を説得しようと試みたが、瑞鶴は依然として答えを変えなかった。しかしそれは天龍たちにあんなことを言われて意固地になっているのではなく、旗艦を任されている者としての使命感と責任感によるものだということを加賀は理解していた、理解していたからこそこれ以上の説得は無駄だと察してしまった。

「…分かったわ、あなたがそこまで強い意志を持っているなら、私も止めるなんて野暮な真似はしない、でもやっぱり私はあなたのことが心配でたまらない、だからひとつだけ注文を付けさせてもらおうわよ」

「注文…？」

「私も一緒に行くわ」



「…先輩、本当に来るんですか？」

「当然よ、それにここまで来たら帰れと言われたって意地でも付いていくわ」

「先輩って頑固だって言われませんか？」

「まあ、それはお互い様って事で」

そんな他愛ないやりとりをしながら瑞鶴たち出撃艦隊は今回の目的地へと向かうべく進軍していく。今回の出撃艦隊は奇しくも「あの日」と同じメンバーであったが赤城がいた枠には加賀が「旗艦補佐」という名目で組み込まれていた。

旗艦である瑞鶴に何かトラブルが起こり旗艦としての役目を続行できなくなった際に加賀がそれを引き継ぐ、という手筈になっている。言うまでもないがこれは加賀が相模に提案したことであり、相模もこれを了承した。

「しっかし、加賀さんも過保護だよね、提督に無理言って旗艦補佐だなんて、瑞鶴さんにそこまでしなくても良いのに、もし加賀さんが動けないような事態になったら置いて行かれちゃうかもしれないよ？」

(…っ!!)

何も知らないくせに。茶々を入れる鈴谷に対しその言葉が出掛かったが、すんでのところでした。それを飲み込む。自分も少し前までは同じような言葉を瑞鶴にぶつけ、心傷きずつけてきたのだ、そんな自分が今更説教など出来る立場ではない。

(……………)

(……………)

一方、そんな天龍と鈴谷とは対称的に、残りのメンバーの扶桑と朝潮は何も言わずに付いてきていた。時折瑞鶴の顔色をうかがう素振りこそ見せるが、鈴谷たちのように茶々を入れるような真似はしていない。

(ある程度心の整理がついたのか、それとも未だに恐れているのか、どちらにせよ艦隊行動に支障が出そうね…)

そんな事を思いながら加賀はこの後の事を考えていた。復帰したとはいえ瑞鶴はまだ本調子ではない、ならば自分が側でサポートしよう、そうすれば何も心配はいらない。

…しかし、それは最悪な形で裏切られることになる。



「ぎやああああっ!!」

「くううっ…!!」

「扶桑！朝潮！」

敵艦隊の攻撃を受けて大破状態になった扶桑と朝潮を庇いながら瑞鶴は艦載機を発艦させる。艀装の発艦システムは生きているので航空戦はこなせるが、大破状態になっているためパフォーマンスが大幅に下がっており、発艦させられた数は通常時の半分にも満たなかった。

(このままじゃ…!!)

瑞鶴は何とかこの状況を打破しようと、現在の戦況を改めて分析する。

今回の撃破目標である深海棲艦の艦隊が停泊しているとされている目的地までもう少しというところまで来ていたのだが、あろうことか待ち伏せしていた敵の迎撃部隊が突如として現れて瑞鶴たちの行く手を塞ぎ、奇襲を仕掛けてきた。

どうやら敵艦隊の旗艦である戦艦棲艦がこちらの電探にジャミングをかけたようで、会敵するまでその存在に気付くことが出来なかった。ここ最近になって電探などの艦娘側の通信網に干渉してくる手段を持つ深海棲艦の存在が確認されはじめており、その対策なども含めて海軍全体の悩みの種となっている。

敵艦隊は旗艦である戦艦棲艦を中心に、戦艦棲艦が3体、重巡棲艦が4体、軽巡棲艦が3体というかなり強力な構成となっている。交戦により残りは戦艦棲艦2体と重巡棲艦2体を残すのみだが、敵の奇襲攻撃によりこちらの消耗が激しくこれ以上の戦闘続行は困難と判断、現在は敵の攻撃をしのぎながら撤退を開始しているのだが…。

(くっ…!!このままじゃ…!!)

艦隊全体が中破、ないし大破のダメージを負っているせいで機動力が落ちており、中々敵を振り切ることが出来ない、特に旗艦である瑞鶴のダメージが深刻なため、それをフォローするためにスピードを落としていくことも撤退を遅らせる原因になっていた。

「がああっ!?!」

頭の中で策を巡らせていると、重巡棲艦の放った雷撃が瑞鶴の艀装脚部に命中、足を取られて転んでしまう。

「瑞鶴!!」

「だ…大丈夫で…す!!」

加賀が慌てて駆け寄ろうとするが、瑞鶴はそれを片手で制して自力で立ち上がるうとする、しかし…

「しまった…!!」

艀装脚部にある駆動機関の中枢部分が今の雷撃で完全にやられてしまった、こうなつては自力で動くことが不可能になってしまう。

「待ってて…!!すぐに…!!あなた達も手伝って!」

加賀が瑞鶴を動かそうと肩を貸し、僚艦にも協力するよう呼び掛けるが、海上で動けない艦娘を牽引けんいんするのはエンジンの掛かっていない自動車を引っ張って動かすのに等しいほどの力を要する。それを戦闘でのダメージが蓄積した大破状態の艦娘が、ましてや現在進行形で敵の追撃を受けている状態でそれを行うのは自殺行為だ。

(仕方ない、か…)

瑞鶴は一瞬の間に思考を巡らせると、今取れる最善の手段を躊躇無く導き出す。

「おやおや瑞鶴さん、もう自力で動けないみたいですね」

「その様子じゃみんなの足を引っ張っちゃうだろうし、こりゃあここに置いていくしかねえかな」

すると、今の瑞鶴の状態を見て鈴谷と天龍がニヤニヤしながら茶化すように言う、2体の目には「あの日」の赤城と同じ状態になっている瑞鶴が滑稽に映るのだろう。



「あなたたち！いい加減に…!!」

それを見た加賀がいよいよ我慢の限界に達し鈴谷たちを怒鳴りつけてやろうとしたが、それよりも早く瑞鶴が口を開いた。

「…ええ、確かにそうね、足手まといは置いていきましょう」

「えっ…?」

「瑞…鶴…?」

その言葉にあっけらかんとする僚艦たちをよそに瑞鶴は艀装から燃料を取り出すと、それを鈴谷に無造作に放る。

「私の燃料渡しておくわ、少ない艦娘に優先的に回して継ぎ足しておきなさい、あと加賀先輩、悪いですけど艦載機少し分けてもらいますね」

そう言うところ瑞鶴は加賀の谷筒から何本か矢を抜き取ると自身の谷筒に補充し、相模へ連絡無線を飛ばす。一方で燃料を受け取った鈴谷は呆然としながらきてきぱきと何かの準備をしている瑞鶴を見ており、時折声にならない声を出すばかりだった。

「提督、私の艀装駆動機関の中枢部分が沈黙、敵の奇襲攻撃により旗艦の私を含め大破者多数、そして現在進行形で敵の追撃を受けています、これらの状況から考えた結果、旗艦の全権限を加賀先輩に譲渡、5体での撤退を行います」

「なっ…!?!」

瑞鶴の言葉に僚艦の全員が耳を疑うような表情をする。旗艦権限の譲渡？5体での撤退？それではまるで…。

『…そうか、本当にそれしか無いんだな？』

「はい、私はもう自力での航行が不可能になりました、僚艦も私を牽引するだけの力は残っていません、よってこれが最善と判断します』

『…分かった』

「すみません、赤城先輩に続いて空母を立て続けに喪う事に…」

『気にするな、旗艦のお前がそう判断したのなら、俺が我が儘を言う事なんて出来ないさ』

そう言つて相模は無線通信を切った、表面上は平静を装っているが、堪えきれない感情を必死に抑えているのがその口調から見え隠れしていた。

「瑞鶴！今のは一体どういうこと!?!」

加賀を含む僚艦たちは今の瑞鶴の無線の内容について説明を求め、本当はうつすらと察してしまっていたが、どこかで違っていて欲しいと願っていた。

「最後の旗艦命令よ、私を置いて撤退しなさい」

## 第8話 「瑞鶴の場合8」

「どういうこと!?!何を言っているのよ瑞鶴!!あなたを置いて帰投しろというの!?!」

加賀は愕然とした表情で瑞鶴に詰め寄る、瑞鶴を置いて自分達だけで帰投する…?そんな事、出来るわけがない。

「もうそうする以外にこれ以上被害を抑える方法はありません、なので加賀先輩…あとは頼みます」

「だから何を言ってるのよ!!あなたを置いていくだなんて、そんな事出来るわけ無いじゃない!」

「黙れ!これは旗艦命令だ!異論は認めない!」

「!?!」

瑞鶴が声を張り上げて加賀の言葉を切り捨てた、これまで瑞鶴がこんなに語気を強めて命令を下した事は無かったため、鈴谷たちはおろか加賀でさえもたじろぐ程の迫力と威圧感を醸し出していた。

「瑞鶴さん…本気なの…?」

「あんたを置いて行けって…」

「何?自分が置いていかれそうな状況になったら泣き喚いて命乞いでもすると思ってた?お生憎様、私は提督から旗艦に任命された時からこの状況は想定していたわ、旗艦である自分は置いていかれないなん

て甘つちよろい事は思っていないもの」

鈴谷と天龍がなおも言葉を返そうとしていたので、瑞鶴はそれをピシヤリと返す、最早取り付く島もないといった感じだ。

「それに、赤城先輩を置いていった私を置いていくことくらい、あんたたちには簡単なことでしょう？扶桑と朝潮だって、置いて行かれるんじゃないか”ってという不安の種が無くなって清々するんじゃないかしら？」

「っ!!」

瑞鶴の半ば核心を突く言い方に鈴谷たちは今度こそ何も言えなくなってしまう。鈴谷も天龍も動けなくなった瑞鶴を揺さぶって命乞いをさせてみたいと思っていたのは事実だし、先程から何も言わずに事の経過を見守っていた扶桑と朝潮も瑞鶴に置いて行かれるのではとビクビクしていたのも事実である。

「改めて言います、現時刻を以て旗艦の全権限を加賀先輩に譲渡、私を置いて撤退しなさい、それが私の最後の旗艦命令です」

再度瑞鶴は加賀たち随伴艦を真っ直ぐ見つめてそう宣言した、最早何を言っても彼女は考えを変える気はない、瑞鶴の旗艦としての使命感、責任感を誰よりも理解している加賀はそれを察してしまった。

「…分かりました、旗艦の命をお受けします」

だからこそ加賀は瑞鶴の意志を継ぐ他に選択肢は無かった、何とも残酷で理不尽な話だと加賀は心の中で悪態をつく。

「全員直ちに戦域から離脱、撤退しなさい、これは旗艦命令よ」

瑞鶴から旗艦権限を受け継いだ加賀は、早速それを行使して随伴艦に撤退を命じる、全員が何かを言いたそうにしていたが、もう何を言っても状況は変わらないという事を理解したのか、大人しくそれに従い撤退を始める。

「瑞鶴、ごめんなさい…私にもっと力があれば…」

戦域から離脱する天龍たちを見守りつつ、加賀は泣きそうな表情で瑞鶴に言う、奇しくもその構図はあの時の赤城と瑞鶴を逆にしたような光景であった。

「先輩が謝る必要は何一つありませんよ、この判断を下したのは私です、だから先輩は旗艦命令に従っただけのこと、誰からも責められたり恨まれたりする筋合いはありません」

「瑞鶴…」

「それに、やっぱり私は臆病みたいなので、先輩からそんな風に言ってもらえる資格なんて無いですよ」

「なにを言ってるのよ、あなたは臆病なんかじゃ…」

「誰かを置いていく事が出来るのは、誰かから置いていかれる覚悟のある者だけだ」

「っ!？」

「あの日赤城先輩から言われた言葉です、でも、やっぱり私は誰かから置いていかれるのが怖い臆病者なので、自分で自分を置いていくことにします」

「瑞鶴……」

気付けば加賀は涙を流しながら瑞鶴を抱きしめていた、これほどまでの覚悟を背負って彼女は今日まで旗艦としての任を全うしてきた、なのに今の自分は瑞鶴に対して何も出来ない、それがたまらなく悔しくて、情けなかった。

それでも加賀には瑞鶴を置いていくことしか出来ない、何故なら自分は今……この艦隊の旗艦なのだ。

「さあ、行ってください」

「……ええ」

自分の身体にしがみつこうように絡まる未練を無理やり断ち切り、加賀は瑞鶴に背を向けて撤退を始めた。

「……さて、それじゃあこっちも仕事を始めますか、悪いけど、ここは死んでも通さないわよ！」

僅かに残っている恐怖心を振り払うように自分を奮い立たせると、瑞鶴は矢を構えて眼前の敵艦隊を見据えた。



遠くの方で聞こえる戦闘音を後ろ髪引かれる思いで聞きながら、加賀たちは鎮守府へ帰るべく歩を進めていた。

時折後ろを向いては遅れている随伴艦がいなかを確認しているが、皆一様に暗い表情かおをしており、そこに一切の会話かおは無い。

(……………)

帰投中も敵艦隊の襲撃が無いとも限らないので、加賀は電探と偵察機の両方で敵の気配を確認しながら慎重に進んでいく。幸い電探のディスプレイに敵の反応は無し、偵察機の視覚モニターにも敵影は無かった。

(…今のところは順調ね)

加賀は都度敵影を警戒しながら進んでいくが、無駄のないスムーズに見える確認作業のほとんどは上の空で行っていた。

(何か…何か瑞鶴を助けるために出来ることは無いのかしら…)

未練はあの時断ち切ったと思っていたが、加賀はそれでもやはり瑞鶴の事を諦められなかった。何とか助けられないかと策を頭の中で巡らせるが、どう思考を巡らせても最後に決まって“あるモノ”がそれを邪魔してくる。

それは…『自分は旗艦である』ということだ。

他の随伴艦を先に行かせて自分だけで瑞鶴を助けに行くか、それとも大損害を覚悟の上で全員で瑞鶴を助けに行くか、加賀の中ではそのふたつの選択肢が頭の中に浮かんでいた。

しかしそのどちらを選んでも付きまとうのは『随伴艦が危険にさらされる危険性がある』ということだ、前者は随伴艦を引率する役目を



放り出して独断行動に走るなど以ての外だし、後者も手負いの状態で敵と交戦するのは危険すぎる賭けだ。

…つまるところ、どんな案を捻り出そうと、瑞鶴を助けるために自分ができることは何も無い、自分は今この艦隊の旗艦だ、ならば随伴艦を生き残らせるために考えて動かなければならない、そのためには足手まといを切り捨てる冷酷さも必要なのだ。

誰かが言っていた、艦隊の旗艦はどんな命令も下せる独裁者なのだ。それを聞いた当時の加賀も旗艦に与えられた権限の強さから同じようなことを思っていたが、これほどあの時の自分を殴ってやりたいたと思ったことはない。

(何が独裁者よ、旗艦なんて…旗艦なんて…)

結局は自分だけじゃ何も出来ない、役立たずじゃない…。

仕方ないと分かりつつも、どうしても拭えない無力感に涙が出そうになる。

「加賀さん」

すると、こちらの心中を察したかのようなタイミングで天龍が声をかける、顔だけ後ろを振り向くと皆が一樣に何やら覚悟を決めたような表情をして加賀の方を見ていた。

「俺たちの気持ちも、加賀さんと同じです、だから命令してください、旗艦としてすべき事をするために」

天龍の言葉を聞き、加賀はハッとする。

そうだ、確かに自分は旗艦だ、ひとりじゃ何も出来ない役立たずだ。

でも、自分はひとりではなかった、いるではないか、頼れる仲間が、  
ここに…。

「…皆さん、旗艦命令です、心して聞きなさい」

◇

「そろそろみんな戦闘海域から離脱できた頃ね」

瑞鶴は片膝をつきながら力無くそう呟いた、加賀の撤退後も奮戦して敵の足止めをしていたが、飛行甲板のダメージが深刻だったために艦載機の性能が大きく落ちており、敵艦隊へのダメージがほとんど通らなかった。

それでもどうにかこうにか戦艦棲艦を1体残すのみ、という状況にまで持ってこれたが、ここで艦載機のストゥックがついに尽きてしまった。

「まあ、ここまで時間を稼げれば十分よね、後は加賀先輩が新たな旗艦としてみんなを引っ張っていつてくれる、だから何も心配はいらない、ひよつとしたら私なんかよりもずっと優秀な旗艦になるかもね」

瑞鶴はそう自嘲ぎみに笑う、既にダメージは限界を越えており、足が少しずつ沈み始めている、轟沈まで秒読みとあったところだろう。

そんな状態の瑞鶴を見た戦艦棲艦はそれを「トドメをさすチャンス」と判断したようで、背中から伸びるアーム状の主砲を瑞鶴へと向

け、撃った。

轟音とともに戦艦棲艦の主砲が火を噴き、砲弾が瑞鶴目掛けて飛んでいく。

「……ここまで、か……」

役目は終わったとばかりに瑞鶴は弓を放り捨て、その場で仰向けに倒れ込む、もう自分に出来ることは何もない、あとは残っていた者たちに未来を預け、このまま終わりの時を待つだけだ。

加賀先輩……後は頼みます。

しかし、その砲弾が瑞鶴に命中することは無かった。

「!?」

突如として現れた艦載機が砲弾に体当たりをかまし、機体諸共誘爆させて瑞鶴を守ったのだ。

一体誰が、と瑞鶴は身体を起こして艦載機が飛んできた方を見やる。

「総員、敵戦艦棲艦の行動を阻害しつつ瑞鶴を救出！そして牽引しながら<sup>フルスロットル</sup>全速力で撤退！」

「瑞鶴を連れて全員で鎮守府に帰る！これは旗艦命令です！」

そこには、声を張り上げて僚艦に指示を出す加賀の姿があった。